20231221　ユニセフ親善大使　黒柳徹子さんの詩

　高名なバイオリニストの娘として東京に生まれました。東京音楽大学を卒業。在学中はオペラを専攻していました。「日本人が最も好きなテレビ司会者」に選ばれること 10 回以上。日本のテレビ界において最も栄誉ある放送文化賞も受賞。トーク番組は、1976 年から今日に至るまで、ほぼ毎日放送され、日本でアーティストとして活躍する人々に贈られる数々の主要な賞も受賞されました。
　誰もが知る、黒柳徹子さんです。1984 年からはユニセフ親善大使として活躍しています。ユニセフを通して子どもたちを救うことは、黒柳さんが親善大使としての任命を受けて以来、最も重要な目標になりました。親善大使就任後は毎年のように、アジアやアフリカ、バルカン諸国などのユニセフの現場を訪問してきました。2000 年 10 月、ユニセフは、「ユニセフ子どものためのリーダシップ賞」の最初の受賞者として黒柳さんを選び、その功績を称えました。

今朝は、その紛争と貧困の最前線を回り、子どもたちと接し励まし続けている黒柳さんの詩をご紹介します。

「私が会った子どもたちは、
みんな可愛かった。

笑っている子ども、
ふざけている子ども、

赤ちゃんを、おんぶした女の子、

さかだちを自慢そうに
見せてくれた男の子、

いっしょにうたった子ども、

どこまでも、ついてきた子ども。

いろんな子どもたちに、会った。

そして両親や姉兄を
目の前で殺された子ども、

ゲリラに腕や足を
切り取られた子ども、

親が蒸発し、
小さい弟や妹を残された女の子、

親友だった家畜が、飢えて
死んでしまいぼう然としていた男の子、

家も学校も、
すべて破壊されてしまった子ども、

難民キャンプを、
たらいまわしにされている孤児たち、

家族を養うために売春する子ども。

だけど、だけど、
そんな、ひどい状況のなかで、

自殺をした子どもは、
一人もいない、と聞いた。

希望も何もない
難民キャンプでも一人も、いない、と。

私は、ほうぼうで聞いて歩いた。

「自殺をした子は、いませんか？」

「一人も、いないのです」

私は、骨が見えるくらい痩せて
骸骨のようになりながらも、

一生懸命に歩いている子を
見ながら一人で泣いた。

『日本では、子どもが、
　自殺してるんです。』

大きい声で叫びたかった。

こんな悲しいことが、
あるでしょうか。
豊かさとは、なんなの？

私がいろんな子どもに会って
日本の子どもに伝えたかったこと。

それは、もし、この発展途上国の
子どもたちを、

「可哀想」と思うなら、

「助けてあげたい」と思うなら、

いま、あなたの隣にいる友達と

「いっしょにやっていこうよ」と話して。

「みんなで、いっしょに生きていこう」
と、手をつないで。

私の小学校、
トットちゃんの学校には

体の不自由な子が何人もいた。

私のいちばんの仲良しは
ポリオ（小児マヒ）の男の子だった。

校長先生は、
一度もそういう子どもたちを

「助けてあげなさい」とか

「手をかしてあげなさい。」とか、

いわなかった。

いつも、いったことは、

「みんないっしょだよ。
　いっしょにやるんだよ」

それだけだった。

だから私たちは、
なんでもいっしょにやった。

誰だって友だちがほしい。

肩を組んでいっしょに笑いたい。

飢えてる子どもだって、

日本の子どもと
友だちになりたい、と

思ってるんですから。

これが、みなさんに、
私が伝えたかったことです。

黒柳　徹子

（黒柳徹子著 「トットちゃんとトットちゃんたち」 講談社青い鳥文庫）

この本を、私がユニセフの親善大使になった 1984 年から、1996 年までの 13 年間に、栄養失調や、
感染症、また内戦や戦争に巻きこまれながら、
愚痴もいわず、大人を信じて死んでいった
1 億 8000 万人の、小さな子どもたちの魂に捧げます。

私は小さいとき、トットちゃんと呼ばれていました。

初めて、ユニセフの親善大使になって
タンザニアに行ったとき、スワヒリ語で、
子どものことを「トット」というのを知りました。

こんな偶然があるでしょうか。私の小さいときの呼び名が、
アフリカでは、「子ども」という意味だなんて。――

（「題名について」より）